

# パリ点描 — 私のふらんす物語 —

上山 武郎 (3組)



最初に断っておこう。小生、吾が同窓生諸氏のような深い格調高いものは書けないのである。だから願わくば軽く読み流してもらいたい。

またまた失敗談である。東京本社のさる部長、直属ではではないが、電話が入った。部長は吾が親会社の一つ、モービル石油のパリ支社の招待を受け、今パリに来ているという。今夜、どこぞに連れていってくれるという。君も来たまよと。そこは、かの有名なムーラン・ルージユだった。

踊り子たちのカンカン踊りを食事をしながら、ワイン片手に見るのである。こんな警沢は留学生にはとうい許されないとこだが、会社のおかげで楽しいひとときを楽しませてもらった。部長がなぜ私を呼んでくれたかは判らない。独りでは心細いと思っただのか、いいところを見せたかったのか。

数日後、再び電話。二、三日後にはパリを発つと。その前にもう一度会っておこうという。先日のお礼もこめて、きばってミシユラン・ガイド星2つのレストランへ案内した。

部長は下痢で苦しんでいるという。口に合いそうなものを選んだが、結局ほとんど手をつけなかった。総じてこちらの料理は脂っこく、味が濃い。使い残したフランスを勉強の足しにと渡してくれた。日本田に換算して、五万円ほどになる。申し訳ない気がして、気晴らしにとストリップ劇場はクレージーハウスなるところへ案内した。客席は立錐の余地もない混みようだった。ボーイにチップを握らせ、席をなんとかしてくれと頼むと、オーケーオーケー、ちょっと待てという。

舞台ではフラッシュ・ライトの中で踊り子が体をくねらせ、踊っている。部長はひどく疲れた様子だったので、すぐにそこを出た。仕方ない、ホテルに戻って休んでもらおう。タクシーをひろった。運転手は言葉巧みにいいところがあるから寄って行ったらという。そういう処の日本人客はいい力モなのだろう。部長も少し心が動いたようだったので、案内してもらった。

シャンゼリゼ大通りに並走する裏通りのキャバレーだった。うす暗い席、客は我々二人だけ。すぐに女が二人やってきた。シャンパンをオーダーしろという。一本も

って来てもらったが、すぐに空になった。部長は少し上気して、ニコニコしていた。もう一本追加しろという女。まあいいだろう。それもすぐに空いてしまった。四本空いたところでそろそろ終わりにしようと思つうちに、更に二本追加された。頼んでいないという部長さんがいいと言ったと女。部長が頷いていたので仕方なかった。

我々の席の少し後の方にダークスーツのでっぴりした男が二人、いつの間にか座っていた。おごりだと私達のテーブルに二本運ばれてきた。次から次に際限がない。これはまずいと部長を促し、席を立った。テーブルには十四本の空きビンが並んでいた。さきほどもらったフランに到底間に合わず、残りは部長がトラベラーズチェックを切った。飲物の減り方が馬鹿に早かった。そんなに飲めば、へべレケになってしまふ量である。どんなカラクリだろうか。さきにオゴリと持ってきた分まで勘定に入っていた。

私は、フランス文化を賛美し、尊敬の念さえ抱いて来た。仏政府の給費留学生として、受け容れてくれ、歴史や哲学、科学を学んだ。フランスの美点を教えられた。しかし、物事には裏がある。裏ではインチキまがいのことが行われている。それを教えられて、今日は良い勉強をさせてもらった。たっぴりの皮肉を返してやった。

自尊心の強い彼らのこと、少しは悪いと思ったのか、さきほどの女達、美味しいオニオンスープを出してくれる店がモンマルトルの丘の下にあるから食べに行こうという。マフィアまがいのボスの許しをもらったからと。本来ならもっと力モからしほりとする時間だろうに。外でタクシーを拾って待っているからという。これでは身ぐるみ剥かれると思い、別のタクシーを拾って宿に戻った。

モンマルトルの裏通りは、この類の女がよく利用する淫売宿が多いのである。下手をすれば、我々の死体がセー又に浮かぶことになったかも。こういう冗談は、我々日本人留学生の間ではまことしやかに語られたものだ。

帰国後、部長とはこの一件、互いにふれないうようにしていたが、これをネタに部長をゆるする？それはしない！

この話、ドイツ人のガールフレンドに話したところ、直ぐにパリ警視庁に訴え出ようという。証拠もないし、無理でしょうと言った、



彼女、あなたがそれでよければいいけどと理解できないという顔をする。日本人との感覚の違いを痛感した。彼女の名前は、インゲ・カイゼル。まるでドイツ代表のような名前だ。彼女とは、仏語学校で知り合った。エッフェル塔を望むシャイヨー宮の下、セーヌにかかるこじんまりとしたイエナ橋。それを私達の小さな橋と呼び、待合わせに使っていた。

ところで、留学生の最初の研修は、フランス語の実践的能力のトレーニング。受講生の力に応じて最長三ヶ月の教育を受けさせてくれるのだが、我々日本人留学生仲間では、この期間が最も楽しかったという者が多かった。

この期間、土日休日には短い遠足が企画され、十フラン前後の安い参加費でバス旅行が楽しめた。これでフォンテンブローの城と森とか、ブルゴーニュ地方のヴェズリーのブドウ畑と酒倉を見学して、試飲とか、ノルマンディのカテドラルを訪れたりした。これで、仏国内の有名スポットを多数見ることができた。フランスは、こういう類の文化事業にかなりの予算をあてているようだ。

クリシー広場から細い路地を入ったところにある私の宿。安ホテルからメトロ口で十数分、凱旋門近くの駅を降りて、五分ほどのところに語学学校があった。パリはこじんまりとしていて便利だった。

教室は朝八時に始まる。昨日は何をしましたかなど、短いやりとりを教官と話しながら全員揃うのを待って、次のステップ、短いシネマを見る。

一シーン毎に止めて、何を喋っているのかを聴き取りをする。初めわからなくても教師の説明を聞いてからもう一度シネマを見せてくれると、実によくわかるのである。

一区切り終わったところで、休憩。皆で近くのカフェに行き、コーヒーを飲んだりクロワッサンを食べたり。

この時のお喋りが実に楽しかった。世界中の方々から受講生が来ていた。教室へ戻ると、先程やった表現のバリエーションである。そして最後は、ランゲージラボでドリル。丁度正午に終わる。

街へ出ると、今朝やったことが直ぐに役立った。メトロに乗る。「フデサンデ」と声をかけられる。「フデサンデ」と言っているのである。「降りますか」と聞かれていたのだ。相手が「ウィ」と言えば、その後についていけばいい。もし相手が降りないなら、場所を入れ替わってくれるのだ。

日本の電車のように何も言わず、後ろからギュウギュウ押すなんてことは全くな



く、実にスムーズに流れるのである。これは我々も見習う方がよさそうだ。

ある日、ラボで復習をしていたら、突然女教師の音がヘッドフォンに飛び込んできた。「そのままのまま、黙って聞いていて」という。今晚ヒマなら、私の家にいらっしゃいと、〇〇通り△△番地よ。

私は、ドキドキしながら彼女を訪ねた。まずアパートの中を案内してくれた。

彼ら仏人は実にオープンに自分の家を見せる。必ずしもキレイに飾り付け、磨きあげているわけではない。普段のままの姿を見せる。

日本人のような見栄、てらいがないのだ。コーヒーを飲みながら、少しお喋りしていると誰かやって来たようだった。その後も一人二人とやって来た。

シュブリース(サブライズパーティー)というものだった。誰が来ると告げず人を呼ぶのだ。それがサブライズといわれる所以だ。

溫和しいアメリカ人青年がいた。金髪碧眼の大柄なノルウェー人の若者がいた。彼は実に楽しく、気持ちのいい若者だった。フランス娘もいた。彼女は日本に関心があるという。彼女の仕事の分野で日仏協力するべきだと。

今度は、私の家にいらっしゃい。一も二もなくOK「次の金曜日」わかりました、必ず行きます。

花束とワインを持って行ってみると、扉は閉まったまま。なんだ、おあいそだったのか。ホテルに戻り、ハタと気が付いた。次の週の金曜日と早合点した私の間違っていた。フランス語と日本語の表現の食い違いによる失敗だった。後の祭り。これでは恋の道は最初につまづいて成就しそうもない。

言葉をめぐる失敗はこれにとどまらない。まだ東京にいた頃、フランス人の娘と懇ろになった。モニック・シエンベルジエ。アルザス生まれで、ソルボンヌの薬学部を卒業したインテリだが、車で独りパリを発って北アフリカを通り、日本にたどり着いたのだった。サハラ砂漠の夕日をあなたにも見せたいと言った。その美しさは言葉につくせないという。

砂漠の中で車が壊れ、どうにもならなくなった。彼女はそこでタイヤを燃やし、飛行機に見付けてもらった。フランスへは戻らずにヒッチハイクをし、インドネシアからは船に乗って日本にたどり着いたという。船賃は、アルバイトをして稼いだらしい。

彼女は東京に住む、ある日本人を頼った。使っていないマンションを使わせても





らっていたが、彼の妻君の機嫌が悪く、他所へ引越すことになった。そして駒場東大裏の小さなアパートに暮らすことになった。丁度私は駒場の学生だった。その頃、私はフランス語の個人レッスンをモニックに受けていた。

初めレッスンを受けていたが、それを受け取らなくなった。曰く、友人から金は取れないと。他の稼ぎに精を出してなかなか会えなくなった。私としては、ちゃんとレッスンを受けて会うことを希望していたのだが。

ある時、ホステスとして働きはじめた渋谷のクラブへ行ってみた。馬鹿高い金を取るこんな処へはあなたは来てはいけないと、厳しく言われた。鼻の下を伸ばした紳士たちが泡銭を使う処だと。

折しも日本は高度経済成長が始まったところだったが、小生は清く貧しく美しく健全な日本青年だった。

彼女には会うチャンスを最大限つくってもらった。湘南の海に行き、伊豆下田の海辺の宿に新鮮な魚を食へに行ったり、調布の飛行場から伊豆大島まで遊覧飛行したり、パイロットのライセンスを取るための訓練を受けていて、まだ単独飛行はできなかったが、同乗者は許されていた。

大変な贅沢のようだが、小生ソフトウェアで稼ぐ先陣を走っていた。一本二十万、三十万、五十万と荒稼ぎしていたし、酒もギャンブルも女遊びにも興味がなかった。結構やっていけたのだ。女性に関しては清纯派、純情路線だった。



ある時、銀座は交通会館の展望のきくレストランで夕食としゃれこんだ。

彼女が言う。日本のサラリーマンは、家族を放ったらかしにして、男だけの付き合いにかまけているけど「あなたはそんなことしないよね！」ウィと答えてしまった彼女の表情が俄かに変わり、冷やかかな空気が流れた。

あーしまった。ノンと答えなければならなかったのだ。後の祭り。否定疑問文に対する答えは、彼我で逆なのだ。大いに弁明した。

「わかったわ」しかし、良いムードは台無し。その夕は取り戻すことはできなかった。ひよっとして僕と結婚してもいいと思っていたのかも知れない。その後、フランスでの友人(ドイツ人)が来るという。だいぶ困惑していた。そして「成行きにまかせられないわ」と。幾度も泊った彼女のアパートに、今、他の男がいる。心穏やかではいらなかった。

私は自滅する形で終わってしまった。私にもっと我慢と寛容があれば、違う形もあり得た。その友人は、アメリカに行く途中で日本に寄ったという話だったから、

ほろ苦い想い出である。

しかし、いろいろなことを彼女から学んだ。イエス・ノーがはっきりしていて、清々しかった。私はそれまで、日本人女性の言葉・態度にすいぶん悩まされてきた。

ある湘南の女、人が振り返る程の美人だった。お茶の水女子大に通っていた。大学の往復りに電話をしつづける。

その頃私は、大手町の本社で働いていた。一緒に帰りましよう湘南電車の時刻を合わせた。

片瀬海岸まで江ノ電に乗って送るのが慣わしになった。

私の最寄駅横浜で降りようとすると、悲しそうな顔で、降るの？と言われると、女の涙に弱い私にはそれを振り切るだけの勇氣はなかった。

デートを心底楽しんでいた時期もあった。しかし、或る

時、彼女の狙いは私のフランス語力。大学のレポートの代筆などやってくれる便利屋にかわったことを知った。

そこできっぱりおさらばすれば良かった。しかしまよ、卒論が終わるまで。私が役に立つなら、このまま気がかぬフリで続けようと思った。

卒論でフランス語文献を読み込み考察を書く。その力は彼女にはなかったから。果たせるかな、論文が終わると、なかなか会えなくなった。電話してもつかまらない。しばらく家中不在のことがあった。そして母親が電話に出た。

「あら、ご存知なかったのですか。うちの娘、結婚したんですよ。ホホホホ」

この後しばらくは日本人の娘とは付き合いしなかった。彼女らの言葉、態度は真意をつかみ難かった。イエスなのかノーなのか。私は初手で空気を読めなかったのだ。それ故、モニックやその他の外国人女性のストレートな物言いに心を動かされたのだ。

パリに暮らし始めて間もなく、五月革命に遭遇した。語学学校に行くために毎朝通るクリシー広場は、大勢の人々に埋め尽くされていた。五人、十人、・・・と人だかりができ、何やら議論を交わしている。

帰りに同じ広場を通ると、未だ議論の輪は続いていた。一人加わり、一人去って、いつ果てるともなく続いている。喋っている事は変わらないのだから、そこは定かではなかった。

パリっ子は政治談議が好きである。彼らはこつこつという乱に敏感である。フランス革命の気分、伝統を持ち続けているらしい。この後どういふ展開になるのか、興味はつきなかつた。そもそもこの騒ぎは学生達が大学寮の厳しい規則や管理に反発して始まったのだが、いろいろの労働組合が同情ストだか連帯ストに次々に加わり、瞬



く間にフランス全土の大都市などに広まった。そして、有名なドゴール將軍の演説で幕を下ろした。ラジオから流れる彼の「フランス人よ、フランス女性よ、皆が望むなら私は退こう・・・」最後は型通り「フランス万歳、共和国万歳」と終わる。今も耳に残っている。

留学生を世話する役所から呼び出しの電話が入った。そして、月極めの給付を前倒して現金で出してくれた。そのうちに何とかなるでしょうと、落ち着いたものだった。

しかし、仏国鉄は、二ヶ月月ストを続け、レールが錆びているのを見た。当初、学生街サンジェルマン界隈では、道路の敷石を剥がし、投石し、バリケードを築いて警官隊の催涙ガスと闘っていた。ガソリンスタンドが閉まり、商店も閉まり、身動き取れなくなりそうだったので、車でパリを脱出することにした。

車は、私が必要なしの貯金をはたいて中古を買った。パリ在住の売れない絵描き、私と同じ留学生など四人同乗して北へ向かった。田舎は、うって変わって平穩なもの。

折しも六月、田園は花咲き乱れ、綺麗に手入れされた農家の庭先、窓、壁にはいっぱいの花。陶然とする美しさだった。その中を自分でハンドルを握り、初めての処女地（勿論、自分にとっての）に分け入っていく気分は至福の幸せだった。

ベルギーを通り、オランダまで足を延ばしたが、皆パリの様子が気になり始め、戻るようになった。情報源は主にラジオだが、なかなか詳しい事は判らない。シャンゼリゼの目貫通りに日航の支店があった。そこには日本の新聞が置いてある。それで初めて詳細な動向や状況、意味が判った。フランス全土の情勢も判った。

次第に日常を取り戻していったが、五月革命後の変化は大きかった。学生達は大きな自由度と発言権を得た。しかし、我々の方は何も変わらず、留学前に提出した研修計画は無視して、この希有の機会を活かし、出来る限り多くの街、史跡、風物を見て歩き、地方色豊かな料理を食べ、一人でも多くの人々と話すことを選んだ。成書、文献印刷物に書かれてあることは、帰国してからでいいと考えた。

こうやって、北イタリアからモンブラントンネルを通り、シャモニーリヨン、パリと。はたまたロワール河沿いの城巡り。南へ下ってアヴィニオン・マルセイユ・ニース・カンヌと今も人気の南仏の旅。

ナポレオンが百日天下を取った時に辿ったルマンの山道、今はカーレースが行われているが、そこに営まれるペンションに泊りながらパリへと。総走行距離一万三千キロ余り。アウトバンを飛ばしてミュンヘン・シュツットガルト・ラインのほとり・マインツ、そしてハイデルベルク（アルトハイデルベルクには美しい古城が

ある）・バーデンまで足を延ばしたり、ほとんど旅から旅で日々を過ごしていた。ヨーロッパの田園は実に美しい。しかし、そうやってパリに戻って来ると、うす汚れた街ながら、何かホツとして心が休まるのである。多くのそこで暮らしたエトランジェに、第二の故郷と言わしめる何かがあるのだ。心安さの一つは、外国人を特別の目で見ることなく無視していることかもしれない。他の国、街では実際そうはいかないから。

帰国して日本は変わっていなかった。五月革命に触発された全共闘の騒ぎ、東大紛争、安田講堂の攻防はあったが、精神面の深層で日本人は殆ど変わっていないのである。フランス社会と日本とはこんなに違うのか。

そして、フランス帰りは一顧だにされなかった。世はこぞって、英語圏に雪崩をうって、つき進んでいた。不平不満を鳴らしても詮なきこと。

永井荷風はフランスの文物に触れ、激しい劣等感と羨望を覚えた。そして、底辺に生きる女達と深く接触し、民衆の生の声を体感した様子がその「ふらんす物語」に活写されている。それに倣って口はばばたいが、私のふらんす物語と副題した。

五月革命の初期、メトロもバスも止って、皆苦労していたと思うが、私は何の義務もない気楽な留学生。起きていることをしっかり見てやるうという気分。

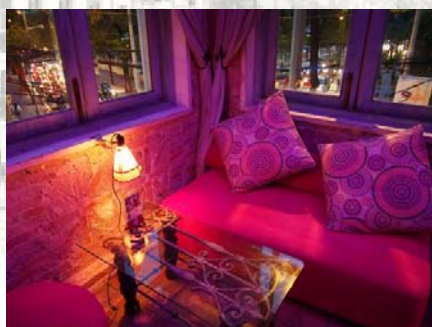
ある日、ルーブル博物館、チュイルリー公園に沿って走るリポリ通りを車で流していたとお考え下され。

妙齢の御夫人が手をあげていた。十人並以上のキレイなヒトだった。車に乗せてさしあげた。この時節、行先を言って、方向が同じなら途中までもとなる。それを何度か繰返して目的地に辿り着くわけである。

私はどうせ暇な身分、住いまでお送りした。そこは十六区。東京でいえば田園調布か成城といった高級住宅街。御夫人は時間があたらお茶でもどうですか、ええ喜んで。(avec plaisir アバック プレジール)

通された部屋は、二十帖以上あるスッキリした居間だった。搾りたてのレモンジュースを振舞われた。彼女は婉然と笑みかけながら、〇〇は好きですかと聞く。「ええまあ」と言い淀む。ソファに座ったまま動かなかった。

重ねて又、〇〇はお嫌ですか。彼女は察知したらしく、ガールフレンドがいるのね、すぐにもお腹大きくなって結婚たわという。確かにインゲのことが心に懸っていた。こんなチャンス、私にはせっかくの誘い、受け入れる勇気がなかったのだ。インゲに操を立てた形だった。夫人はそれ以上追及しなかった。





もし手を出していたら、マフィアの親分にちよんぎられていたかも？まあそれはなかっただろう。車を自分で運転しなくてもも子分か何かがアッシーやるだろうから。インゲの住いも五分と離れていない同じ界隈にあった。

所詮は旅の男。肌を許しても後腐れはあるまいという心情だろうか。そういう人もいるだろう。しかし、私の出会った女達は、皆誠実で自分に正直で健気にさえ感じられた。モニック然り、私が折れなければ、そのまま日本に住み着いたかもしれない。そういう風にして日本人の妻になったフランス人を何人か知っている。

古い仏映画、キャサリン某だったろうか。パリを旅するアメリカ人を演じていた。短い恋の終りはパリの東駅。列車の中、発車際に降りようとするが、思いを振り切ってパリを発つ。悲しい横顔のアップがスクリーンいっぱい延々と流れ、フェイドアウト。記憶が不確かで混同混乱があるかもしれない。イタリア映画で舞台はローマだったかも。遊び人のイタリア男の方が如何にもで、様になるかも。

ところで、最近はいいフランス映画、イタリア映画がさっぱりかからない。うすっぺらなハリウッド映画ばかりでいささが辟易する。

インゲに日本に行かないかと聞いてみた。日本は貧乏だからと断られた。この頃、確かにそうだった。池田勇人がトランジスターのセールスマンと揶揄されるくらいだった。ホンダもマン島のレースで素晴らしい成績をあげ、賞賛を受けたが、まだ四輪車は作っていなかった。トヨタは内向きで、欧米には出ていかなかった。そんな時代があった事、改めて驚く。

クリスマスのイルミネーションが点く頃パリを発った。もう資金が底をついていた。オルリー空港まで(シャルル・ドゴール空港はまだない)自分のシトロエンで送ってくれた。お手紙ちようだい。握手をして別れた。まだ彼女とはキッスするまでいっていなかった。だから別れの抱擁とはならなかった。

おみやげに買ったセーターを最近までとっておいたが、虫が食いボロボロになって捨てた。私の青春と同様に満州に始まった破天荒の我が人生。そろそろ終わりが。でも、性懲りもなく二十数年間、スウェーデン女性、セシリア・ベルクマンとクリスマスカードのやりとりを続けている。彼女は女医、夏休みに日本の医大の見学に来ていたのだ。美人である。

一度会いに行きたいが、小生、飛行機に乗れない体になってしまい、諦めざるを得ない。もう一度パリが見たい。今度来る時の楽しみにと残した所も行けない。アンヘラ (Angela) コロンチウチウチにも行けない。何の因果か！

波瀾万丈というよりは、私のシッチャカメッチャカの人生。無駄話しに付き合わせてしまっして申し訳なく思う。書き残したことの方が多いが。ここに擲筆するとしよう。

## 訃報です！二〇一四年九月二日、上山武郎くんが亡くなりました

○かなり早い時期に「八期記念誌」に海外体験記「パリ点描―私のフランス物語―」を投稿して頂きました。きつと武郎くん、フランス美人の登場する自分の完成作品を見たかったのでは、そして仲間の反響も知りたかったのではと思つて居ます。もうほんとうに「意外！」も「早いぞ、嘘でしょう！」もない、人生のラストパートのくくりの中に私達はいまいます。(大石慶二) ○だんだんこのような事が増える歳になったんですね、「冥福を祈るばかりです。(海江田勝) ○私も今朝、堀田女史からの電話でたまたま起こされました。女史からの連絡によると、亡くなったのは八月三十日、今日、午前九時から告別式となっております。タイミンク的には何もできない時刻でした。三組を中心に連絡し、小生を含めて九人の香典を集めて小生の弔文を付し、送金を完了しました。(堀添智) ○訃報に接し、びっくりしています。(木佐貫晃嗣) ○上山武郎くん世界の報を知り、驚いています。同じ桜島出身者の一人として謹んで冥福をお祈りします。(藤崎宏忠) ○上山武郎氏のご冥福を心からお祈りいたします。(谷川二郎) ○ただただ、ご冥福をお祈りするばかりです。合掌(西山和宏) ○こんにちは。少し若すぎるような気がしますが。記念誌見ずに先立たれてしまい残念です。面白そうな体験記だったと思います。ご冥福をお祈りします。合掌(木場祥雄) ○頭の良かった上山武郎君は東京工大を卒業後、大企業に就職しました。あるとき、同僚の〇したちが「今、日本で一番難しいのは東大の医学部よ」と話しているのを耳にして「よし、それなら自分も受けてみる」と言い、なんなく合格、その後医学の道に進んだそうです。八期生仲間では有名なエピソードでしたね。この記念誌にも、まだまだ多くが集まらないうちに中編を書いてくれました。見せてあげたかった。そして得意げな顔を見だかった。(堀田昌子)

## 八期通信アーカイブス

2006年 第12号  
斯波 紘子(4組)



・・・年を重ねただけで、人は老いない。理想を失うとき、初めて老いる。歳月は、皮膚にしわを増やすが、情熱を失えば、心はしぼむ・・・今、この言葉が好きです。

年齢と共に、シワ、シミ、タルミ、魅力、美しさが衰え、楽しみも少なく思われがちですが、年を重ねるといやでも人生経験も重ねます。人との出会いも多くなり、それがいかに大きく関わっているかもつくづく感じます。現在、96歳の義母を見てますが、よく知人にビックリされます。「とてもそんな様子が見えない」これも、年を重ねた知恵の表れでしょうか。

本との出会いも多く、そこから何かを吸収します。そして、くらしの中に結晶となって表れます。私の思い込みでしょうか？体力、脳力に退りを感じながらも日々、小さな出来事に楽しみを見出し、ワクワクするような感動を得たり、静かではありますが、それは何とも言えない幸せを感じます。待つだけでなく自分から楽しみを見つけていく姿勢も忘れないようにしたいものです。

その昔、若く未熟で自信のなさを隠すべく、前へ前へと頑張り急ぎ進む半面、常に何かに追いかけているような不安を持っていた。若さだけのあの頃の青春時代の私は、今の私に(スローライフの毎日ではあるか)太刀打ち出来ないと思えてきた。これも、年増女性の自分への慰めでしょうか？でも、遠い思い出の中に自分を回想するのも楽しいもの。思い出を消したくないから・・・

時には、思い出に浸りながら、今を素敵に、今も青春だと生きる自分でありたいと思っています。